

## モモ

一杉 秀樹

ミヒヤエル・エンデの「モモ」を読みました。本棚の片隅、ケストナー全集の隣にずっとあったことは知っていたのですが、奥付から僕が40歳の頃に買ったものとわかりました。今これを読むことには何かの力が働いたのか、とってしまったお話しでした。

「モモ」は人間の時間を盗む泥棒たちから、不思議な少女モモが時間を取り返す話です。この悪党たちは、もっと働けと人々をそそのかし、仲間や家族と楽しむ時間を奪い、金と物が世の中の全てだと思えるように仕向け、取り上げた時間を時間貯蓄銀行にため込んでいたのです。

読まなければと思うことのない、久しぶりに楽しい読書でした。箱の底には小学5、6年生以上と註がありました。僕には児童文学が合うということでしょうか。この調子でいけば5年後にはそれなりの大人の小説も読めるようになると期待しましょう。

著者がこの本を世に出したのは1973年ですから50年前です。この辛辣な物質文明への批判が童話の形で書かれてから世の中が改善された様子はありませんし、ますます悪化しているようです。人類への警告はいろいろ発せられていますが、適切に対応する叡智は未だ見つけられていないようです。人間は行き着くところまでいかないと懲りないのでしょうか。

百年以上前すでに、同じような警鐘を鳴らした人が日本にもいます。

「所謂現代文明の大機構の組織に加はる個人は機械的習慣の奴隷となり、自ら作り出したこの怪物に無情にも制馭せられている。西洋は自由といふことを高言してしてあるにも拘わらず、富を得んと競って真の個性は害われ、絶えず募り行く渴望に幸福と満足は犠牲にせられている。西洋は中世の迷信から解放せられたことを誇っているが、これに代わった富の偶像崇拜を何とみるか。現代の絢爛たる仮面の背後には何といふ苦悩と不満がかくされていることであらう。」(原文英語) これは1904年(明治37年)に岡倉天心が書いたものです。